Cognitive Studies, **22**(3), 456-462. (Sep. 2015)

どうか名前で判断しないでください
—名前の印象判断に項目内音韻類似性と音素配列頻度が与える影響—

中山 真孝・齊藤 智

Processing fluency influences judgment as metacognitive cue. Laham, Koval, & Alter (2012) demonstrated name-pronunciation effect whereby easy-to-pronounce (i.e., easy-to-process) names were judged more positively. In their study, however, the "pronouncability" was not defined by objective criteria, which may cast doubt on the internal validity of the effect. To overcome this limitation, the present study replicated the name-pronunciation effect by manipulating two objectively defined and well-established pronouncability factors: within-item phonological similarity and phonotactic frequency of the name. Phonological similarity is manipulated by making the constituent morae share the same vowel or not. Phonotactic frequency is defined by a composite score of mora, bi-mora and position-mora frequency. We asked participants to rate impression of names, presenting nonwords as names of foreign person who would come to their office. The result indicated independent effects of phonological similarity and phonotactic frequency with phonologically similar and low phonotactic frequency names being rated negatively. The present study confirmed the internal validity of the name-pronunciation effect in the previous study.

Keywords: phonological similarity（音韻類似性）, phonotactic frequency（音素配列頻度）, impression judgement（印象判断）, fluency（流暢性）

1. 問　題

われわれは判断・意思決定を行う際に，様々な情報を考慮したり影響を受けたりする．そのうちの 1 つとして，判断・意思決定に関連する処理のしやすさ即ち流暢性 (fluency) をメタ認知的手がかり (metacognitive cue) として用いていることが知られている (Alter & Oppenheimer, 2009; Alter, 2013)．処理の流暢性については，好意度 (e.g., Reber, Winkielman, & Schwarz, 1998)，真実度 (e.g., Reber & Schwarz, 1999)，有名度 (e.g., Jacoby, Woloshyn, & Kelley, 1989) などの様々な判断への影響が示されている．

Laham, Koval, & Alter (2012) は名前の好意度などの判断にその処理の流暢性つまり，発音しやすさが影響することを示した．発音しやすい名前は，好意度が高く評定され（研究 1・4），仮想投票場面で候補者としての評価が高かった（研究 2・3）．さらに，実際の弁護士を対象とする調査では発音しやすい名前の人が高い地位についていた（研究 5）．しかし，彼らの研究では「発音しやすさ」が主観評定によって測定されており，客観的な基準によって「発音しやすさ」が定義されているわけではない．また，研究 1・4 の実験では，いくつかの変数の影響は統計的に統制されているものの，「発音しやすい名前」と「発音しにくい名前」の選定は研究者の直観によって行われており，客観的な基準と手続きに基づいているわけではないため，「発音しやすさ」と未知の変数が交絡している可能性が否定できない．

Forster (2000) は，呈示される刺激が単語か非単語かを判断する語彙判断課題の成績を言語処理の

Please Do Not Judge Me by My Name: Effects of Within-Item Phonological Similarity and Phonotactic Frequencies on Judgement of Name Impression, by Masataka Nakayama (Graduate School of Education, Kyoto University), and Satoru Saito (Graduate School of Education, Kyoto University).

研究者が直観的に予測できることを示した．実験では，語彙判断に影響する変数である単語頻度を統制した単語対を呈示し，どちらが実際の語彙判断課題で反応時間が速いかの予想を求められた．結果として，参加者は偶然より高い確率で予想することができ，何らかの潜在的な知識が判断に影響を与えている可能性が示された．このような研究者の知識は（無意識的に）刺激選定に影響する可能性があり，Laham et al. (2012) においてもなんらかの交絡要因を生んでいる可能性が否定できない．したがって，Laham et al. が示した処理の流暢性の名前の印象判断に対する影響の内的妥当性を示す必要がある．近年，心理学あるいは科学全体において研究結果の再現可能性の低さが議論となっており，再現実験の価値が見直されている (e.g., Pashler & Wagenmakers, 2012)．内的妥当性の低さは結果の再現可能性（特に概念追試の成功可能性）を低めるひとつの要因であり，内的妥当性を高めること，そして結果を再現することは今まで以上に重要となっている．

そこで本研究では，できる限り客観的に定義可能な基準と手続きによって刺激選定を行った実験で Laham et al. (2012) が示した効果の再現を試みた．具体的には，認知心理学の知見から，単語の処理に影響することが知られている 2 つの要因を，客観的に定義された処理の流暢性の要因として操作し，名前の印象評定への影響を検討した．異なるメカニズムで流暢性に影響を与えると想定される 2 つの要因操作の効果を同時に示すことで，1 つの流暢性の要因操作よりも操作されているものが流暢性であることの蓋然性を高めることが可能となり，効果の内的妥当性をより高めることができる．

1 つ目の要因は項目内音韻類似性 (within-item phonological similarity) である．似た音からなる音の系列（記憶リスト・単語）は，憶えにくく言い間違いやすく発音に時間がかかる (e.g., Acheson & MacDonald, 2009; Baddeley, 1966; Cohen-Goldberg, 2012; Hurlstone, Hitch, & Baddeley, 2014; Page, Madge, Cumming, & Norris, 2007)．特に，すべての母音が同じ系列（e.g., カマラナサ）はすべて異なる系列（e.g., コメラニス）と比べて処理しにくい．本研究では名前の項目内での各モーラの母音の共有・非共有を操作することで音韻類似性を操作した．母音を共有する名前（i.e., 音韻類似条件）の方がそうでないものと比べてネガティブに評価されると予測できる．

2 つ目の要因は音素配列頻度 (phonotactic frequency) であり，ある言語（e.g., 日本語）によく出てくる音や音の並びからなる語は憶えやすく言い間違いにくく発音に要する時間が短い (e.g., Gathercole, Frankish, Pikkering, & Peaker, 1999; Nakayama & Saito, 2014; Tamaoka & Makioka, 2009; Tanida, Ueno, Lambon Ralph, & Saito, 2015)．音素配列頻度はすでに，音素配列頻度の高い英語のブランド名が「買いたい」と思われることが英語話者を対象とした研究で示されており (Vitevitch & Donoso, 2012)，人の印象と日本語を用いる本研究でも同じ効果が予測できる．追試的に音素配列頻度の効果を確認することで，先行研究からの手続き等の細かな変更点（異なる好意度評定の対象，異なる言語，異なる文化圏など）が結果に重大な影響を及ぼしていないことを確認することができる．

音韻類似性と音素配列頻度の交互作用効果については，特定の予測はなく探索的となるが，効果を検討可能なような調査デザインを用いた．

2. 方 法

2.1 参加者

インターネット調査会社（マクロミル社）に調査を依頼し，20 代〜60 代の会社員 344 名（年齢性別はおよそ均等），20 代学生 72 名（性別はおよそ均等）がオンライン上で参加した．「2.3. 手続き」で述べるように，参加者は「職場にやってくることになった外国人の名前」の印象判断を求められたが，このような判断には，会社員としての経験が何らかの影響を与えている可能性がある．認知科学（特に心理学的アプローチ）では簡便性から 20 代の大学生を調査対象とすることが多い．大学生と会社員のデータの比較は，今後の研究で同様の調査を大学生対象に行う際に，その結果を会社員にも一般化可能であるとみなせるかにとって重要である．そこで，本研究では一般の会社員に加えて 20 代学生を対象とした．サンプルサイズは会社員の各年代のサンプルサイズと同程度となるようにした．

この内，2 種類の評定（下記）の少なくとも 1 つですべて同じ値を回答した人は回答の妥当性が保証されないため，分析から除外した．結果として 238 名分を分析対象とした．

2.2 材 料

意味的な影響を統制するため子音と母音からなるモーラ 5 つからなる非単語 52 項目を用いた．52 項目は 26 ペアからなり，ペア内ではすべての子音とその順序は同じであり，一方は語内の母音がすべて同じ（音韻類似条件）もう一方はすべて異なる（音韻非類似条件）ようにした（e.g., カマラナサ vs. コメラニス）．またペア内の音素配列頻度は同じとなるようにし，ペア間では分散が生まれるようにした．音素配列頻度はモーラ頻度とバイモーラ頻度 (Tamaoka & Makioka, 2004) および位置-モーラ頻度（Nakayama, Tanida & Saito, in press）の 10 を底とする対数変換値の合計値とした．モーラ頻度およびバイモーラ頻度はモーラおよびバイモーラが日本語単語の中にどれくらいの頻度で出現するかを日本語コーパス (天野・近藤, 2000) から計算したものである．これらが語内での出現位置を考慮しない頻度であるのに対して，位置-モーラ頻度は，第 1 モーラなど，出現位置を制約した場合のモーラの出現頻度を同コーパスから計算したものである．語長を 5 モーラ（i.e., 使用した非単語と同じ長さ）に限定して計算した値と，すべての語長の単語を用いたもの（出現位置は語頭を基準とする）のいずれも用いた（下記参照）．

このような刺激統制を実現するために以下のような方法で非単語の生成と選択を行った．まず，子音 (k, s, t, n, h, m, r) と母音 (a, i, u, e, o) からなる CVCV バイモーラを選定した．そのうち，子音が同じ同士で一方のバイモーラ内の母音が同じバイモーラのペアを作り（e.g.,「ケレ」と「キラ」），ペア間でバイモーラ頻度の対数変換値の差の絶対値が 0.3 未満のペア 829 ペアを選出した．これらをマッチされたバイモーラペアとよぶ．すべてのマッチされたバイモーラペアを第 1，第 2 モーラとして，第 2，第 3 モーラのペアがマッチされたバイモーラペアとなるという制約のもと，第 3 モーラをランダムに選んだ．同様に第 4，第 5 モーラを選定することで，5 モーラ語ペアを 829 ペア作成した（いずれかの段階でマッチされたバイモーラペアが存在せず途中終了したものも含む）．これを 32 回繰り返して 5 モーラ語ペアを 26528 ペア作成して，このうちから，子音の繰り返しがあるペアと，母音が繰り返さない方の語で母音の反復があるペア，重複しているペア，マッチされたバイモーラペアが存存在せず途中終了したもの，非単語内の連続する 3 モーラ以上が単語となっているものを除いた．ここでは単語を単語頻度コーパス (天野・近藤, 2000) にエントリーのあるものと定義した．残ったペア内のバイモーラ頻度・位置モーラ頻度（語長 5 とすべて）の対数変換値のペア内での差分を計算し，それぞれの変数についてこのセットでの差分の標準得点を求め，3 つの標準得点を足して絶対値が 0.7 未満のペアを 26 ペア選出した．

2.3 手 続 き

各非単語を「今度職場にやってくることになった外国人の名前」だとして，52 項目それぞれについて名前だけから判断して「どれくらい一緒に働きたいと思うか」と「どれくらい友達になりたいと思うか」のそれぞれの評定を 6 件法（1. 全く一緒に働きたいと思わない/全く友達になりたいと思わない〜6. とても一緒に働きたいと思う/とても友達になりたいと思う）で求めた．2 つの質問を用いたのは測定の信頼性を高めるためである．2 つの質問（評定）はブロック化して行い，ブロックと項目順はランダマイズした．

3. 結 果

本研究では，複数の参加者が複数の項目（名前）に回答をしているため，参加者による効果と項目による効果を同時に統計的に推定・統制した上で，2 つの流暢性の要因の効果を検討しなければならない．また，各種デモグラフィック変数と質問の種類に関しても特定の予測はないが，もし効果があるとすれば，流暢性の効果を検討する上で統制すべきである．そこで，評定値を従属変数として混合効果回帰分析 (Baayen, Davidson, & Bates, 2008) を行った．分析には統計ソフトウェアとして R (R Core Team, 2013) を用いた．参加者の項目の効果を推定・統制するために，変量効果として，参加者と項目の切片項，参加者の傾斜項として音韻類似性，音素配列頻度それら交互作用項を投入した (Barr, Levy, Scheepers, & Tily, 2013)．固定効果として，統制変数と予測変数を投入した．統制変数は，性別（男性：−1, 女性：1），年齢，質問の種類（働きたい：−1, 友達になりたい：1），職業（学生：−1, 会社員：1）を投入した．予測変数として，音韻類似性（類似：−1, 非類似：1）と音素配列頻度の標準

表 1 回帰分析の結果

変量効果	分散	標準偏差	相関係数		
参加者（切片）	0.713	0.844			
参加者（傾斜）					
音韻類似性	0.006	0.078	.05		
音素配列頻度	0.001	0.028	.20	.99	
類似性と頻度の交互作用	0.001	0.032	.17	−.98	−.93
項目（切片）	0.004	0.065			

固定効果	回帰係数	SE	t 値	χ^2 値	p 値
（切片）	3.150	0.163	19.36		
性別（男：−1, 女：1）	0.075	0.054	1.38		
年齢	−0.005	0.005	−1.21		
質問（働く：−1, 友達：1）	-0.007	0.004	-1.81		
職業（学生：−1, 会社員：1）	0.006	0.083	0.07		
音韻類似性（類似：−1, 非類似 1）	0.045	0.011	4.01	15.14	$p < .05$
音素配列頻度（標準化得点）	0.034	0.010	3.34	10.60	$p < .05$
類似性と頻度の交互作用	−0.010	0.010	−0.95	0.90	$p = .34$

得点およびそれらの交互作用項を投入した．得られた予測式（表 1）に対して，統制変数に 0（年齢は平均値），予測変数には各条件の値を代入したものを図 1 に示した．音素配列頻度の各条件の値は平均 ± 1SD の頻度の値を代入した値を示している．このモデルとそこから当該変数のみを除いたモデルを尤度比検定で比べることで，各予測変数の効果の有意性の検定を行った (Barr et al., 2013)．その結果，音韻類似性と音素配列頻度の主効果がそれぞれ有意で，交互作用は有意でなかった（表 1 のカイ 2 乗値および p 値参照）．音韻的に類似した名前が，また音素配列頻度の低い名前ほどネガティブに評定された（表 1, 図 1）．また，このモデルとは別に，職業（学生か会社員か）と 2 つの流暢性の要因との可能なすべての交互作用も投入したモデルで職業関連の効果の検討も行ったが，職業の主効果および 2 つの流暢性との交互作用はいずれも有意ではなかった (χ^2s < 0.59; ps $> .1$)．このことは大学生の結果が会社員にも一般化可能であることを示唆している．

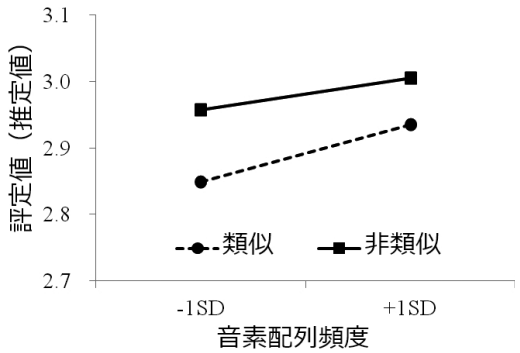


図 1 音韻類似性と音素配列頻度の評定値への影響

4. 考 察

結果から，音韻的に類似した名前が，また音素配列頻度の低い名前ほどその名前をもつ人がネガティブに判断されることが示された．つまり，流暢性に影響を与えるとされる 2 つ変数の客観的指標においてその値が低いほどネガティブに判断されるといえる．これにより，主観評定による処理の流暢性の測定および研究者の直観による刺激選定という問題点を克服して，Laham et al. (2012) が示した効果の内的妥当性を示すことができたといえる．ただし，厳密な刺激統制と複数要因での同時的な効果の実証によって処理の流暢性の要因と他の要因（e.g., 名前から想起される実在の言語や民族，人種）との交絡の可能性は最小化されたとはいえ，今回用いた刺激で偶然に交絡が発生していた可能性は完全には排除できない．異なる刺激セットを用いた追試等今後の検討によって，示された効果の妥当性をより高めることができるだろう．

本研究は，印象判断やそれへの流暢性の影響とい

う社会心理学的な構成概念・仮説を，認知心理学的知見を用いて検討したという点で，諸分野の知見を統合的に用いる認知科学的アプローチの有効性を示している．これまでの研究では背景との色や明るさのコントラスト，事前接触の有無など様々な流暢性の操作が，好意度，真実度，有名度など様々な判断に影響することが示されている (Alter & Oppenheimer, 2009)．音韻類似性はこれまでに言語産出や記憶への影響が示されてきたが，(そこで生じる流暢性を介して) 印象判断にも影響することを本研究が初めて示した．音素配列頻度は英語のブランド名の印象へ影響することがアメリカ合衆国において示されていたが (Vitevitch & Donoso, 2012)，英語と日本語の言語構造の差異によらず同様の効果が確認できた．また，友人選択（の基準）や帰属のバイアスといった心理行動傾向には一定の文化差が存在することが知られている (e.g., Choi, Nisbett, & Norenzayan, 1999; Kitayama & Uskul, 2011; Ogihara & Uchida, 2014) が，音素配列頻度や流暢性の効果に関しては，一定程度の効果が日本においても存在することが確認できた．以上をあわせて音素配列頻度の操作が日本語を話す日本人に対しても有効であることを確認した．このような音韻類似性および音素配列頻度は，処理の流暢性の要因として，今後様々な判断に対する影響の検討に用いることができるだろう．特に，本研究が客観的に操作可能な処理の流暢性を示したことは，今後同様の操作を用いる研究での再現可能性を高めることに貢献するだろう．客観的操作はその効果を必ず再現可能にするわけではないが，少なくとも手続きの再現可能性を高めることができる．手続きの再現は結果の再現の必要条件であり，この点でも本研究が示した操作は今後の研究に貢献するだろう．

最後に，本研究の社会的意義について述べる．近年の日本においては少子化問題と関連して，海外からの移民受け入れが議論となっている．また，グローバル化の流れの中で学界・経済界において外国人労働者の採用が活発化する可能性がある．本研究は外国人の名前に関する印象判断バイアス（i.e., 流暢性の好意度への誤帰属）の存在を示したが，このようなバイアスが採用時等に存在することは望ましくない．特に，音素配列頻度は日本語の名前の間では分散が少ないが，日本語ではない外国人の名前では分散が大きくなり，バイアスの影響が大きくなることも想定される．流暢性の好意度等への影響は，それが明らかに誤帰属に基づいているとわかる状況においては，見られないことから (Alter & Oppenheimer, 2009)，流暢性の効果について，その存在と生起要因（e.g., 音韻類似性と音素配列頻度）を示すことは，名前によるバイアスの低減に貢献することになるだろう．

謝　辞

本研究は JSPS 科研費 11J07208 の助成を受けたものです．

文　献

Acheson, D. J., & MacDonald, M. C. (2009). Twisting tongues and memories: Explorations of the relationship between language production and verbal working memory. *Journal of Memory and Language*, **60** (3), 329–350. doi:10.1016/j.jml.2008.12.002

Alter, A. L. (2013). The Benefits of Cognitive Disfluency. *Current Directions in Psychological Science*, **22** (6), 437–442. doi:10.1177/0963721413498894

Alter, A. L., & Oppenheimer, D. M. (2009). Uniting the tribes of fluency to form a metacognitive nation. *Personality and Social Psychology Review*, **13** (3), 219–35. doi:10.1177/1088868309341564

天野 成昭・近藤 公久 (2000).『NTT データベースシリーズ 日本語の語彙特性 第 2 期』. 東京: 三省堂.

Baayen, R. H., Davidson, D. J., & Bates, D. M. (2008). Mixed-effects modeling with crossed random effects for subjects and items. *Journal of Memory and Language*, **59** (4), 390–412. doi:10.1016/j.jml.2007.12.005

Baddeley, A. D. (1966). Short-term memory for word sequences as a function of acoustic, semantic and formal similarity. *The Quarterly Journal of Experimental Psychology*, **18** (4), 362–5. doi:10.1080/14640746608400055

Barr, D. J., Levy, R., Scheepers, C., & Tily, H. J. (2013). Random effects structure for confirmatory hypothesis testing: Keep it maximal. *Journal of Memory and Language*, **68** (3), 255–278. doi:10.1016/j.jml.2012.11.001

Choi, I., Nisbett, R., & Norenzayan, A. (1999). Causal Attribution Across Cultures: Varia-

tion and Universality. *Psychological Bulletin*, **125** (1), 47–63.

Cohen-Goldberg, A. M. (2012). Phonological competition within the word: Evidence from the phoneme similarity effect in spoken production. *Journal of Memory and Language*. doi:10.1016/j.jml.2012.03.007

Forster, K. I. (2000). The potential for experimenter bias effects in word recognition experiments. *Memory & Cognition*, **28** (7), 1109–15.

Gathercole, S. E., Frankish, C. R., Pikkering, S. J., & Peaker, S. (1999). Phonotactic influences on short-term memory. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, **25** (1), 84–95.

Hurlstone, M. J., Hitch, G. J., & Baddeley, A. D. (2014). Memory for serial order across domains: An overview of the literature and directions for future research. *Psychological Bulletin*, **140** (2), 339–73. doi:10.1037/a0034221

Jacoby, L. L., Woloshyn, V., & Kelley, C. (1989). Becoming famous without being recognized: Unconscious influences of memory produced by dividing attention. *Journal of Experimental Psychology: General*, **118** (2), 115–125. doi:10.1037//0096-3445.118.2.115

Kitayama, S., & Uskul, A. K. (2011). Culture, mind, and the brain: current evidence and future directions. *Annual Review of Psychology*, **62**, 419–49. doi:10.1146/annurev-psych-120709-145357

Laham, S. M., Koval, P., & Alter, A. L. (2012). The name-pronunciation effect: Why people like Mr. Smith more than Mr. Colquhoun. *Journal of Experimental Social Psychology*, **48** (3), 752–756. doi:10.1016/j.jesp.2011.12.002

Nakayama, M., & Saito, S. (2014). Within-word serial order control: Adjacent mora exchange and serial position effects in repeated single-word production. *Cognition*, **131** (3), 415–30. doi:10.1016/j.cognition.2014.03.002

Nakayama., M., Tanida., Y., & Saito., S. (in press). Long-term phonological knowledge supports serial ordering in working memory. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*. doi: 10.1037/a0038825

Ogihara, Y., & Uchida, Y. (2014). Does individualism bring happiness? Negative effects of individualism on interpersonal relationships and happiness. *Frontiers in Psychology*, **5** (March), 135. doi:10.3389/fpsyg.2014.00135

Page, M. P. A., Madge, A., Cumming, N., & Norris, D. G. (2007). Speech errors and the phonological similarity effect in short-term memory: Evidence suggesting a common locus. *Journal of Memory and Language*, **56** (1), 49–64. doi:10.1016/j.jml.2006.09.002

Pashler, H., & Wagenmakers, E. J. (2012). Editors' introduction to the special section on replicability in psychological science: A crisis of confidence? *Perspectives on Psychological Science*, **7** (6), 528–530. doi:10.1177/1745691612465253

R Core Team. (2013). R: A language and environment for statistical computing. Vienna, Austria: R Foundation for Statistical Computing.

Reber, R., & Schwarz, N. (1999). Effects of perceptual fluency on judgments of truth. *Consciousness and Cognition*, **8** (3), 338–42. doi:10.1006/ccog.1999.0386

Reber, R., Winkielman, P., & Schwarz, N. (1998). Effects of perceptual fluency on affective judgements. *Psychological Science*, **9** (1), 45–48.

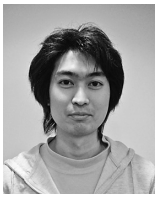
Tamaoka, K., & Makioka, S. (2004). Frequency of occurrence for units of phonemes, morae, and syllables appearing in a lexical corpus of a Japanese newspaper. *Behavior Research Methods*, **36** (3), 531–547.

Tamaoka, K., & Makioka, S. (2009). Japanese Mental Syllabary and Effects of Mora, Syllable, Bi-mora and Word Frequencies on Japanese Speech Production. *Language and Speech*, **52** (1), 79–112. doi:10.1177/0023830908099884

Tanida, Y., Ueno, T., Lambon Ralph, M. A., & Saito, S. (2015). The roles of long-term phonotactic and lexical prosodic knowledge in phonological short-term memory. *Memory & Cognition*, **43**, 500–519. doi:10.3758/s13421-014-0482-2

Vitevitch, M., & Donoso, A. (2012). Phonotactic probability of brand names: I'd buy that! *Psychological Research*, **76** (6), 693–698. doi:10.1007/s00426-011-0374-z

(Received 8 Jan. 2015)
(Accepted 14 April 2015)



中山　真孝 (学生会員)

2009 年京都大学教育学部教育科学科卒業．2011 年京都大学大学院教育学研究科教育科学専攻修士課程修了．現在同博士課程在学中．現在は言語における系列順序情報処理を専門的に研究していますが，人間の心について広く考えたいと思っています．日本心理学会，日本認知心理学会，日本社会心理学会，日本基礎心理学会会員．



齊藤　智

1993 年京都大学大学院教育学研究科博士後期課程学修認定退学．博士（教育学）．鳴門教育大学，大阪教育大学を経て，2002 年より京都大学大学院教育学研究科教育認知心理学講座助教授（2007 年より准教授）．2000 年–2001 年，ブリストル大学客員研究員．人間の記憶の機能とメカニズムに関する認知心理学的研究に従事．日本心理学会，日本教育心理学会，日本認知心理学会，Association for Psychological Science, Experimental Psychology Society 会員．Psychonomic Society Fellow.

付録：刺激一覧表

音韻類似	音韻非類似
ケレテセメ	キラツソメ
ミヒニキチ	モフネカチ
ツムフヌル	タムヘニロ
シニミチリ	サネミツロ
トノロコソ	ツニロカセ
リシチヒニ	リスタホネ
リニミヒチ	レニムホタ
キニヒリミ	キナフロメ
クムフツル	カミフトレ
ラマハカナ	リモハクネ
ノホコソト	ナフケシト
ルムクツス	ルモカチセ
チニリシキ	ツナロセキ
ツスクムフ	ツサキメホ
ソロノトホ	シレノタフ
ハカナマサ	ホクナミセ
コロソホノ	コレサフニ
ラカマナサ	ロクマネシ
トホソモロ	ツホセミラ
キシニミヒ	クサネミホ
タラサカハ	トルセカヒ
トノホコモ	タノヘキム
リミヒチニ	レムホタニ
ロトソモホ	レチソムハ
ノモホトコ	ノムヒタケ
カマラナサ	コメラニス